

「命をいただく」ということ

胆振地区 北海道登別明日中等教育学校 3年 小路 藍花

私が今まで育ってきた環境は、科学技術が発達している今の時代ではめずらしいかもしれない。有機農業を営んでいること。無添加の食品しか食べないこと。そして「肉」は飼育している鶏や父が山で捕った鹿を解体して食べることに。食卓に並ぶものは全て自分達で育てた有機のもので、それが私にとっては当たり前で普通のことだった。だから、小学校のおやつはみんなが持って来るようなカナルで交換し合えるようなものではなく、当時の私は戸惑うこともあった。しかし、そこには両親の強い願いが込められていたのだ。「環境と体にできるだけ負荷をかけない暮らしをしたい」「未来の子供のために、自分の体も遺伝子も傷付けないようにしたい」そんな願いを持って両親は私を育ててくれた。この環境で育ってきた私だからこそ、強い思いを持って主張したいことがある。それは、私たちの命は多くの命で成り立っているということだ。

私が初めて鶏の解体をしたのは小学生の頃だった。両親や兄が解体するのを見てきたし、私も羽むしりなどを手伝ってきた。食べるために命をいただくこの光景は当たり前だと思っていた。しかし、鶏を実際に自分の手で殺し、解体するのは命の重さを直接に感じるものだった。首に包丁を当て、切ったときに硬直する鶏の筋肉。流れる真っ赤な血。死ぬ直前に必死でもがく姿。この全てが私に命の重さを突き付けてくる。5分前まで生きていた鶏が私の手によって、私の手の中で死んでいく。命の重さは計り知れない。

だからこそ、私たちはその命を少しも無駄にはしない。私には分かるのだ。命は繋がっているということが。肉となった鶏は私が食べることで血や肉になり、私という命を支えている。この経験が私に、繋がっていく命の重さ、食と命の密接な繋がりに気付かせてくれた。だから、みんなにも気付いて欲しい。命の重さ、食との繋がりに。

さて、コンビニエンスストアやファストフード、24時間営業のスーパーやレストラン。食べたい時に、食べたいものが手に入る。そんな豊かさの一方で食品ロスの問題は深刻だ。今、日本全国で約632トンもの命が無駄になっている。その約半数は家庭から出たものだ。つまり、私たち1人1人が意識し合って生活できれば、捨てられるだけの命を減らすことができるのだ。その意識を持つために、忘れてはならないことがある。それは、私たち人間が自然と共に生きているということだ。豊かさの中で、このことはつい忘れがちだ。だから、平気で食べ物を残したり、美味しくないと、食べたくないと言って簡単に捨ててしまう。もし、食卓に生きている鶏をそのまま食されたら、きっと誰もが食べるのを躊躇するだろう。そして、きっと誰もが簡単には捨てられない。なぜなら、生きているからだ。

しかし、想像して欲しい。普段食べている肉も魚も、命あるものだったのだ。形を変えただけで、その命の重さは変わらない。生きていたという事実は変わらないのだ。誰かが命を育て、そしてその命を奪うという行程の上に私たちの命は成り立っている。それを理解して欲しい。大切にしたい。

だから、私は「いただきます」「ごちそうさま」を欠かさずに言う。命をいただいているという立場で命を大切にしたいから。命に感謝したいから。

私は忘れない。私たち人間が自然と共に生きているということ。私は忘れない。私たちは多くの命を支えられ、新しい命を育てていく存在なのだという事実。